

現代短歌 アンソロジー

〈兄弟姉妹〉 三十首

佐藤弓生 「かばん」
Yumio Saito



きょうだいのいる人といない人とは、きょうだいに关するイメージはかなり異なるのではないだろうか。実のきょうだいに对する愛情や憎悪は個別的にして複雑なものはずだが、きょうだいを持たない人にはそうした関係性自体が想像や憧憬の対象になる。後者の私は、次ページの栗木・山埜井作品に、リアリティではなくイマジネーションを通じて共感する。

また、結婚など家族構成の変化によって生じる、いわゆる義理のきょうだいという関係がある。浜名作品の〈姉となる人〉という表現はそうした事情を簡潔に伝える。義姉の場合、年上とは限らない。べつの意味で複雑な感情を呼ぶこともあるだろう。

キリスト教の結婚式でよく歌われる讚美歌の歌詞「妹背をちぎる家のうち」はむろん夫婦関係の成立を述べるものだが、ところどころ古語「せ」から私が始まる連想する和歌は、処刑された大津皇子を悼んで同母姉の大伯皇女が詠んだ挽歌「うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む」である。この歌の、どこか肉親関係を超えるような情愛を、輪廻転生的なムードで水原作品は継ぎ、日常的なレベルで日高作品は継いでいる、とも思わ

れる。

男性が「いも」を詠うニュアンスもやはり異性への思慕、欲望までもはらみ、現代にいたるまで生々しい。とりわけ平井作品のドラマ性は異色といえよう。その「いもうと」はいわばドラマの役割、登場人物のひとりである。対照的に、馬場作品の「いもうと」は擬人化ながら、鳥の名を得て親しい「顔」を見せる。

肉親に具体的に取材した小島作品は、ほほえましくもはかない「今」を感じさせる。花山作品はさらにユーモラスで、過去の稚気とはいえ本気の闘いであったことに笑いを誘われる。他方、成人して離れ暮らすきょうだいへの思い、たとえば三井作品には、歳月の堆積ゆえか、ある種の厳肅さが満ちている。



船に酔ひてやさしくなれる／いもうとの眼見ゆ／津軽の海を思へば

石川啄木「一握の砂」

いもうとの小さき歩みいそがせて千代紙かひに行く月夜かな

木下利玄「銀」

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は銭を呉れたまひたり

斎藤茂吉「赤光」

父死ぬる家にはらから集りておそ午時に塩鮓を焼く

土屋文明「往還集」

あらはなるうなじに流れ雪ふればささやき告ぐる妹の如しと

近藤芳美「早春歌」

手風琴一ついできて家出でし弟を待つながき夜々あり

清水房雄「一去集」

雪しづか終世めとらぬわが兄をゆめ純潔とおもはざれども

葛原妙子「原牛」

雨ふりだすその遠景に母と百日紅立ち老ゆる姉妹のごとし

塚本邦雄「感幻樂」

生れざりしわが姉妹恋ふ湿原に点々と小さき沼は光りて

栗木京子「中庭」

持てざりし兄、姉、妹、吾子たちがいづくにかひそみあるごとし 春

山埜井喜美枝「はらりさん」

娶らざるグリム兄弟兄のこと草のいきれに咽びていたる

小高 賢「耳の伝説」

姉となる人の見立てしカンカン帽赤きリボンの夏も終りぬ

浜名理香「銀のノブ」

追憶のもつとも明るきひとつにてま夏弟のドルフィンキック

今野寿美「花絆」

雑木々を被える藤のむらさきに縊れて揺るる遠き兄たち

久々湊盈子「黒鍵」

胸びれのはつか重たき秋の日や橋の上にて逢はな おとうと

水原紫苑「びあんか」



一枝の櫻見せむと鉄格子へだてて逢ひしはおとうとなりき

辺見じゅん『幻花』

空豆のくぼみのやうな姉として疲労つかれのふかき弟おもふ

日高堯子『玉虫草子』

いもうとが手を貸したこと逃げのびる筈の一羽を雪のまうえで

平井 弘『前線』

髪かみの芯まで雨に濡れいもうとのたとえば前の世はほととぎす

藤原龍一郎『夢みる頃を過ぎて』

あきあかねするどく腹を曲げて居りめまいして読むあねの日記を

加藤治郎『昏睡のバラダイス』

海見れば彼方に島見ゆ波照間はてるまとよべばいもうとのごとくなつかし

馬場あき子『南島』

牙の抜けかわる今夜は腕ぐみの兄があたしの夢の番人

高柳路子『あたしごっこ』

菜の花にからし和えればしみじみと本音を聞きたい飛雄馬の姉さん

飯田有子『林檎貫通式』

ひらかれし母の子宮に弟と私のいた痕あとが残れり

入谷いずみ『海の人形』

眠剤を飲めばあまたの本抱へ夢ぬちに兄、影のみで来る

中川宏子『いまあじゆ』

姉の恋妹の恋おたがひを知らねば問はず迎へ火を焚く

川野里子『王者の道』

ムササビのような寝姿恋人がいますと思えずわが妹よ

小島なお『サリンジャーは死んでしまった』

死ね！死ね！とわれを罵る弟のいて死んでやろうと寝転びていつ

花山周子『屋上の人屋上の鳥』

兄の針と弟の針すれちがふ日時計は雪に影すべらせて

春日井 建『井泉』

薔薇図譜に薔薇溢れいてわが兄はこの冬深く眠りていたり

三井 修『薔薇図譜』